

富士通で40年務めた医療ITのプロは なぜ精神科特化のクラウド開発に挑むのか 「MOMACE Cloud」に込めた 医療DXへの次なる一手

株式会社エム・オー・エム・テクノロジー
たにもとだいほち
谷本大八 取締役常務執行役員

医療界全体のDXが叫ばれる中、精神科領域のIT化は大きな課題となっている。この領域に対し、株式会社エム・オー・エム・テクノロジー（東京都、平山光彦代表取締役社長）は精神科病院向け電子カルテ「MOMACE Cloud」（モムエスクラウド）を投入した。この開発を率いるのは、富士通株式会社で40年にわたり医療システムの最前線で活躍してきた谷本大八取締役常務執行役員。医療ITのプロは、なぜ同社を選択し、新製品の開発に挑んだのか、医療ITの現状や課題、医療の未来像について話を聞いた。



—まずは谷本常務のご経歴についてお聞かせください。

谷本 私は1984年に富士通株式会社に入社し、以来40年ヘルスケア領域の営業および販売推進部門（ヘッドクォーター部門）を担当して参りました。80年代から90年代は医療のIT化は限定的（オーダーリング化）でした。しかし、情報通信技術（ICT）とアプリケーション技術の普及が、電子カルテを始めとする医療ICTを加速化させたのだと思っています。昨今を含め、印象的なターニングポイントは、電子カルテの導入が、施設内でサーバー設備等を保有する「オンプレミス型」から、サーバー設備の保有が不要な「クラウド型」へシフトしている実態と、今後さらに期待されるであろう「AI」等の最先端技術の融合・実装化です。この一連の流れの中

精神科病院のデジタル化は遅れている

—40年間、そうした日本の医療ITの王道を歩んでこられた谷本

で、富士通のヘルスケア領域における電子カルテ等の「製品販売」と「製品企画」の双方を一線の現場で体現できたことが、私の財産となっています。

—まさに電子カルテの黎明期からご存じですね。その中で病院が抱える課題はどのように変化したのででしょうか。

谷本 紙カルテ運用を「電子化」し、蓄積されたデータをどのように経営改善や医療の質の向上に「活用」するか、そして、自院内のみならず地域の他の病院やクリニック・介護施設とどのように「連携」していくかへと変化していきましました。この変化は、私自身がヘルスケアを起点に地方創生や地域包括ケアを成すシステム構築に携わりたいという思いが強まったことと重なります。

常務が、精神科領域に特化したクラウド開発という新たな挑戦を決

意した背景には何があったのでしょうか。

谷本 今の医療業界の課題として、①医療従事者の人手不足②物価上昇などによる経営の不安定化③医療現場のデジタル化の遅れ④医師の働き方改革等、課題が山積し、とりわけ医療DXの遅れが顕著であると考えています。これは、

電子カルテの普及率が60%という数字に端的に表れていますし、なかでも精神科病院は、一般の病院と比べて導入がかなり遅れており普及率は40%の状況です。

—普及率が低い理由は何でしょうか。

谷本 電子カルテ化の普及率は、急性期系の一般病院と精神科病院における診療業務等の内容の違いに起因していると考えています。一般病院では、検査や処置などの指示（オーダー）が多く、診療報酬請求（DPC）の包括計算などもあり、これらを電子カルテ化することにより、目に見える効果や経済的効果が得られます。一方、精神科病院は、診察・面談・心理・看護観察等の記録中心の業務が多く、オーダー機能の恩恵が限定的で、

電子化による業務効率の恩恵を受けにくい側面を持っています。また、長期入院患者が多く入院単価も低いため、収益構造上設備投資の余力が少ないと言われており、ICT投資の優先度が低い傾向にあると考えられます。そのため、精神科病院では未だに紙カルテで運用している病院が多く残っています。精神科は、5疾病6事業に数えられており、地域包括ケアに

高い技術力とサポート力を生かした製品開発が特徴

—MOMTECの強みや特徴は何でしょうか。

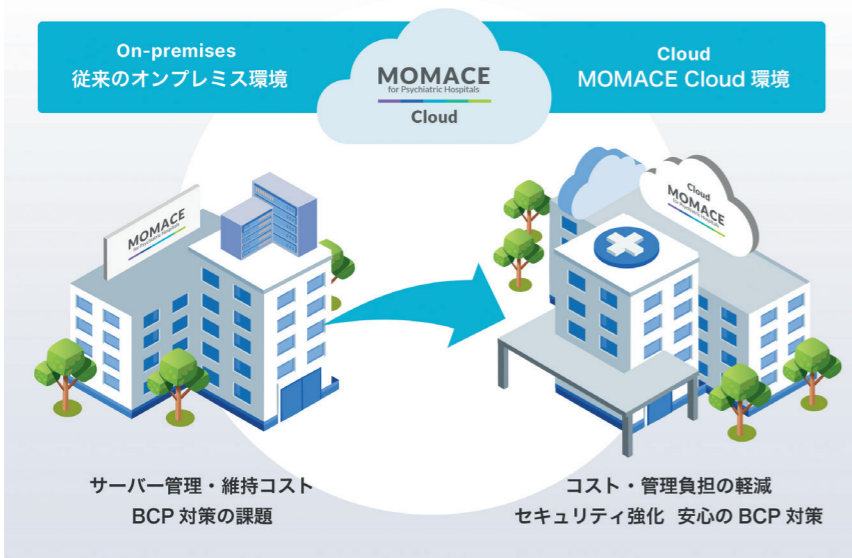
谷本 弊社は、三菱商事、富士通の支援を受け、三菱事務機械販売から独立して2001年に誕生しました。長く、富士通製電子カルテの販売・サポート、保守を担っており、現在はヘルスケア領域に特化した医療情報システムにおける専門会社です。そして、弊社が培ってきた高い技術力や顧客に寄り添うサポート力を生かし、2008年に独自開発したのが、精神

において多職種によるチーム医療が不可欠な領域でありながら、電子化による情報整備や情報共有の基盤が脆弱だと感じています。私が、40年間お世話になった富士通での経験からみても、精神科領域が抱える課題こそが、社会的な問題の一つであると感じたため、株式会社エム・オー・エム・テクノロジー（略称・MOMTEC）への転社を決意しました。

科病院向け電子カルテ「MOMACE」（モムエス）です。精神科病院では、患者1人当たりのカルテへの記載量が多いという特徴があります。そこで、一般的な電子カルテでは対応できない精神科病院特有の機能を加えたオンプレミス型のシステムを開発しました。

—25年7月に「MOMACE Cloud」をリリースされました。このシステムは、従来製品と何が違うのでしょうか。

谷本 まず、病院はサーバーの維



精神科医療に、クラウドという “新たな選択肢”を



持・管理などの業務・コスト負担が軽減されます。また、大きなシェアを持ち信頼性の高いメガクラウドを採用していますので、強固なBCP・セキュリティ対策を実現するクラウドネイティブなシステムです。その上で、オンプレミスを有しており、使い慣れた操作の

継承、完全なデータ移行が可能で
す。これは、病院経営に直結する
メリットとなります。このクラウ
ドシステムの設計思想の根幹に
は、富士通時代に培った大規模シ
ステムの安定稼動ノウハウが寄与
していると自負しています。
——連携という観点ではいかがで
しょうか。

谷本 そこが「MOMACE Cloud」の真価です。外部連携を前提に設計しており、国策である電子カルテ情報共有サービス等、全国医療情報プラットフォームとの連携を始め、精神科病院に求められる必要な情報の共有が可能です。これにより、質の高い地域包括ケアの実現が期待できます。また、既存技術での、きめ細やかな機能拡張に留まらず、精神科医療に役立つ、生成AI等の最

先端技術を用いた退院サマリの自動要約や、アナムネ・カウンセリ

精神科領域を起点に地域医療全体の質を向上

——今後の御社の事業展開は。

谷本 弊社はこれまで通り、富士通のパートナーとして一般病院向けの電子カルテの販売・導入・保守を行って参ります。と同時に、弊社独自のソリューション展開として「MOMACE」、「MOMACE Cloud」の販売にもより一層注力して参ります。

一般病院向け事業と精神科病院向け事業の両輪があるからこそ、医療全体の課題を複眼的に捉え、最適なソリューションを提供できると確信していますし、地域医療全体の質の向上に貢献することが弊社の使命であると捉えています。
——最後に、病院経営者へメッセージをお願いします。

谷本 病院経営において、医療ICTの利活用は、ますます重要になります。医療ICTは経営と不可分であり、病院経営の要である

ング記録の自動生成機能を実装すべく準備を進めているところです。

と考えています。

自身の40年の経験と社会課題解決に挑む弊社の先進性と将来性は、必ずや皆さまのお役に立つと確信しています。今後もお客様に寄り添い、皆さまに伴走させていただくパートナーであり続けたいと考えています。ぜひ弊社の取り組みにご期待ください。

株式会社エム・オー・エム・テクノロジー (略称:MOMTEC)

〒101-0021
東京都千代田区外神田1-16-8 GEEKS AKIHABARA
03-5209-2561
momtec_hp@group.momt.co.jp

MOM
Technology